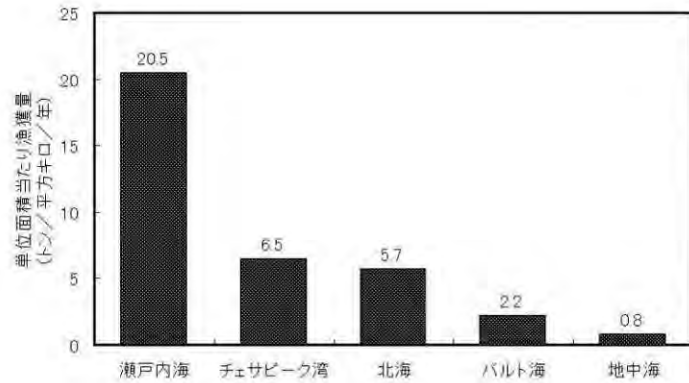


瀬戸内海が豊かな海であることは、チェサピーク湾をはじめ海外の閉鎖性海域と単位面積当たりの漁獲量で比較すると明らかである(図5)。その理由は、「湾奥と外洋の間に多くの海峡が存在する瀬戸内海では、海峡部の強い潮流により表層水と底層水が鉛直混合され、効率的に栄養物質が何度も光合成に用いられる。鉛直循環流と海峡の存在が世界最大となる瀬戸内海の単位面積当たりの漁獲量を支えているからである。」と説明されている。



出典：Okaichi and yanagi, 1997年

図5 世界の主要な閉鎖性海域の漁獲量

## 6) 工業

瀬戸内海における産業は、江戸時代から「たたら製鉄」、「製塩」、「陶器づくり」等が盛んになり、明治時代から大正時代にかけて政府の富国強兵政策の殖産興業より飛躍的に発展することとなった。

まず瀬戸内海は綿花の一大産地でもあったため、明治初期から官営や政府援助による紡績工場が、大阪、岡山、姫路、倉敷、福山、広島、江田島、松山などに設立され、繊維産業が盛んになった。鉱工業の分野は、江戸時代から採掘をしてきた別子銅山が、明治時代になると住友財閥により西洋式の採掘方法や精錬方式が採用されたことから、新居浜一帯が工業都市に発展した。宇部では、石炭の採掘により関連する色々な企業が設立され、工業都市へ発展した。また、中国地方で産出する砂鉄を利用した「たたら製鉄」が江戸時代より盛んであったことから、1875年にたたら製鉄の技術で官営広島鉄山が設立され、続いて洋式高炉の官営八幡製鉄所が設立された。国の支援により培われてきた製鉄技術は、第二次大戦後に呉、堺、大分、加古川、福山、水島、光などへの新たな製鉄所の建設に寄与し、日本の鉄鋼業の中核の地位を占めることとなった。瀬戸



内海は1895年に呉海軍鎮守府が開設され、第一次大戦後の経済発展により軍艦や海運用商船の需要が高まり、因島を始めとして瀬戸内海各地に造船所が設立され、日本で最も造船の盛んな地域となった。第二次大戦後に、エネルギー源が石炭から石油への転換や、石油化学製品の生産が始まり、大規模な石油コンビナートが形成された。これは、広大な旧海軍、陸軍跡地や浅場の埋め立てにより工業用地を容易に確保することができたためと考えられる。1962年に制定された「拠点開発構想」を始めとして、「新産業都市建設法」、「工業整備特別地域整備法」などの政府の誘導政策により、大きく発展することとなり、日本国内の石油コンビナート15か所の内、7か所が瀬戸内海に立地されている。

この様に、現在の瀬戸内海は、鉄鋼、造船、自動車、石油化学製品など重化学工業を中心とした産業構造となっており、これらの主要基幹産業の生産能力は全国の40%以上を占めている。また、瀬戸内海の関係府県の製造品出荷額は、全国の28%を占めている。